

# この国に 生まれてよかった この時代に 生きてよかった

## ■二人の青年を引き寄せたもの

「念ずれば通ず」という言い方がありません。もつぱら精神論の世界や宗教界で用いられているような気がしますが、そうではありません。それだけではないことの手がかりがあります。例えば、新聞を広げたとき「障害」や「福祉」の活字が目飛び込んでくるのがそれです。ぼんやりとテレビやラジオを聞いていて、「障害のある人」と流れると途端に耳を傾けなくなるのも同じです。障害分

野に身を置く私たちは、無意識のうちにこうしたキーワードにこだわっているのです。キーワードへの接続を念じていると言ってもいいかもしれません。

これには根拠があることが脳の研究でわかってきました。その正体は、脳の中のミラーニューロンとされ、これに刷り込まれていた関心事や願望が作用するのだそうです。

1970年代の半ば過ぎ、離れ離れの二人の青年をつないでくれたのが、まさに「念ずれば通ず」でした。二人の名は、一人は名古屋の鈴木清覚さん、もう一人は東京にいた私

ほとんどは公的な保障の得られない、いわゆる無認可の状態での運営がなされており、したがってそこには共通する困難な条件がたくさんあります。……」と記されています。

## ■駅のベンチで2時間

この3月に、東京・清瀬市にある社会福祉法人清瀬わかば会で講演をする機会がありました。そこでびっくりすることがありました。それは、講演の後の質問コーナーでの小室さんという母親の話でした。「もう40年ほど前になりますかね。中央線か総武線で、都心のホームでしたが、ベンチで藤井さんと鈴木さんが大きな声で話をしているのを見かけましたよ」とありました。これはまちがいありません。そのときの光景を私も鮮明に覚えています。当時、小室さんは療護施設の職員で私のことを知っていたそうです。

共同作業所全国連絡会の結成の輪郭がはっきりしたのは、1977年3月の愛知県蒲郡市でのある会合でした。この会合で、鈴木さんと私は、来る8月の全障研第11回大会の期間中に結成しようと腹をくくりました。

残された期間は5ヵ月弱で、急ピッチで準備が進められることになります。交通費などの経費面からそう会うことは難しく、また長距離電話料金が高額な時代で電話で話すこともままなりません。とはいえ、結成にあたり話しておかなければならないことがたくさんありました。やりくりをして直接会うことにしました。何を隠そう、それが小室証



## 第5回 地域で創り、全国とつながりながら

### 藤井克徳

日本障害者協議会代表・きょうされん専務理事

ふじい かつのり／1949年生まれ。養護学校教員をへて、日本初の精神障害者のための共同作業所「あさやけ第2作業所」や「きょうされん」の活動に専念。日本障害フォーラム（JDF）や、日本障害者協議会（JD）など、様々な団体の役員をつとめる。

言の飯田橋ホームベンチでの「鈴木・藤井会談」でした。結成を間近にひかえ、最終的な詰めを行なったのです。座っていた時間は2時間ほどだったと記憶しています。当時の二人の懐事情からして、喫茶店の費用を浮かせたかったのだと思います。

日本列島の十数カ所の地点で、まるで豆電球がともるような感じで共同作業所の存在が確認できました。これらの作業所に、急いで手紙を書いたり電話を入れて、結成会への参加を呼びかけました。

## ■共同作業所全国連絡会の誕生

結成会は、1977年8月6日の夕刻から始まりました。全障研第11回全国大会の第一日目でした。場所は、JR名古屋駅から西方へ1・5kmほどの中村区にある旅館「稲本」の二階でした。会場となった旅館「稲本」の二階の大部屋は、開会時には90人でぎっしりとなりました。想定人数の30人を3倍も上回ったのです。大部屋の前方中央には小ぶりの座卓が置かれ、主には鈴木さんが提案、私が司会を担いました。

ここでの熱い討論をもとに、一ヵ月後の大阪・吹田市での第一回運営委員会、当面の活動方針や会則案が起草されることになりました。組織の体を成すのは、この第一回運営委員会からになります。

そして、いよいよ結成の最大の目的の一つだった全国の共同作業所関係者の交流へとつながります。「共同作業所全国連絡会第1回



▶共同作業所全国連絡会第1回全国集会「働こう障害者も働けるんだ僕たちも」の様子